



婦人の社会的地位は少し向上

第十四回 世論調査結果から

ことし二月に実施した「第十四回世論調査」の結果がまとまりましたので、そのあらましをお知らせします。

今回の調査は、「婦人の社会参加と高齢化社会」をテーマに、市民が婦人についてどのように感じているか、また、高齢化社会を迎えるに当たり、どのように考えているかを把握し、今後の市政運営の基礎資料とするために実施しました。

なお、調査にご協力いただきいた回答者のみなさんに厚くお礼申し上げます。

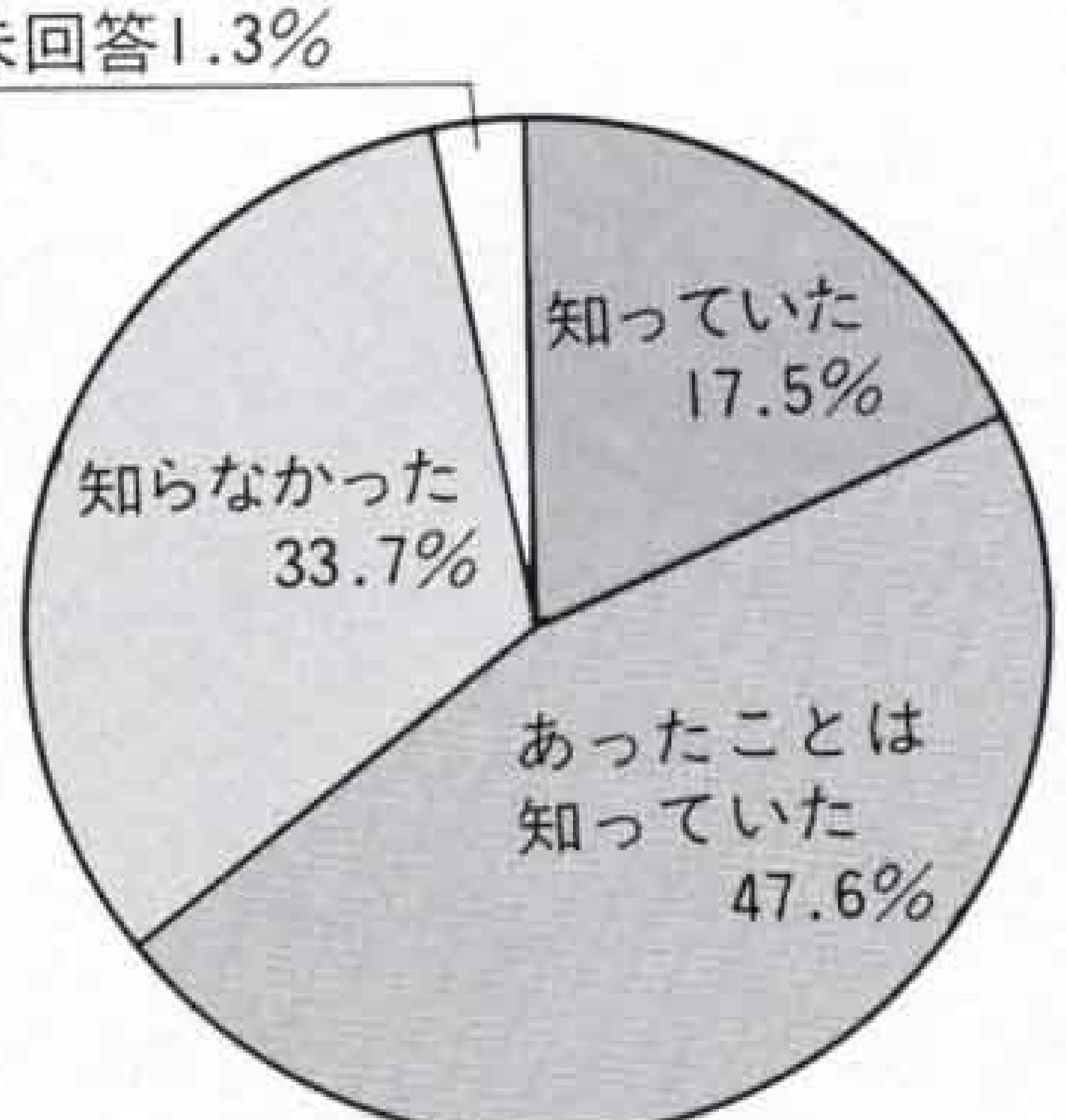
市内在住の満二十歳から、八十歳までの男女三、〇〇〇人を住民基本台帳から無作為抽出して行いました。

調査対象者 三、〇〇〇人
回収票 一、五七五人
回収率 五二・五%

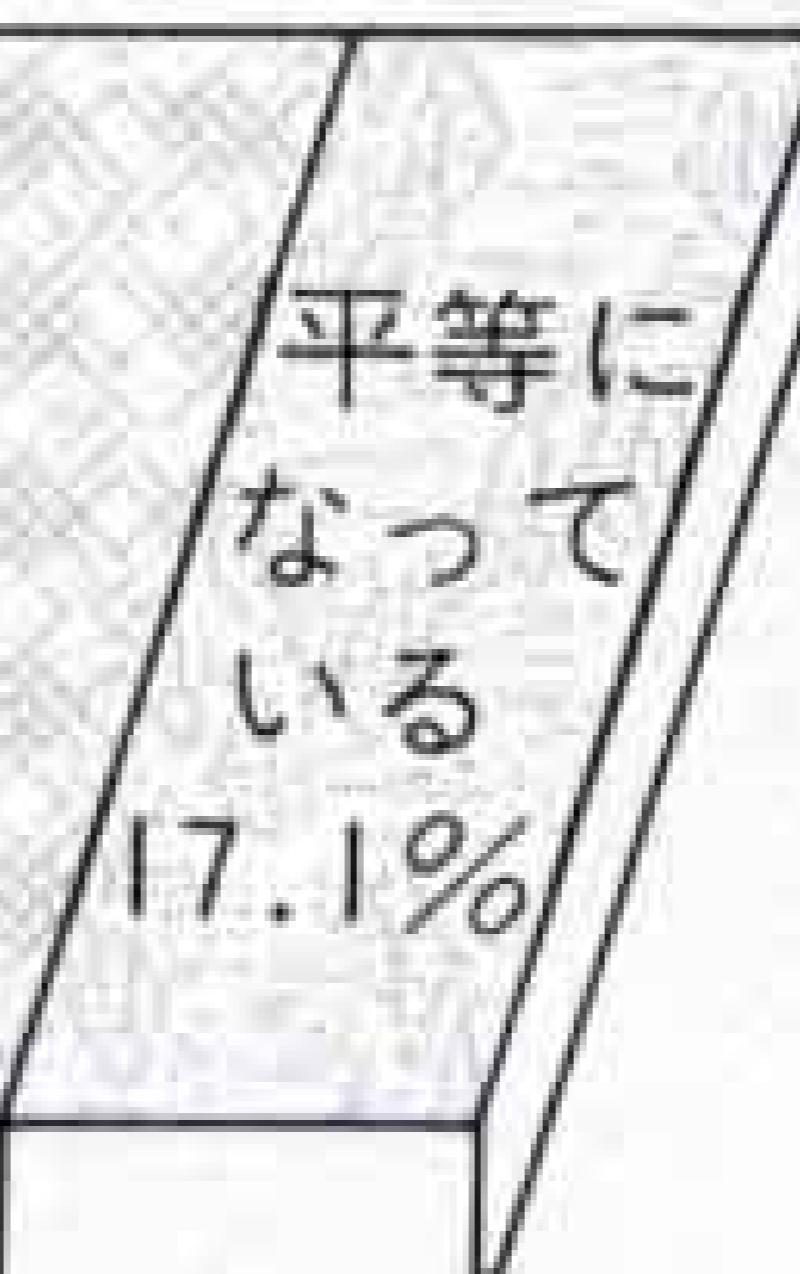
婦人の社会参加について

質問一、あなたは「国連婦人の十年」をご存じでしたか。

各設問の¹は、少數点以下第二位を四捨五入してありますので百²にならないことがあります。また、調査の結果はおおよその傾向としてお読みください。



質問二、現在、日本の社会で男女平等になっていると思いますか。



男女別でみると、「目的や意義についても知っていた」と答えた割合は、男性の方が高い率を示しました。

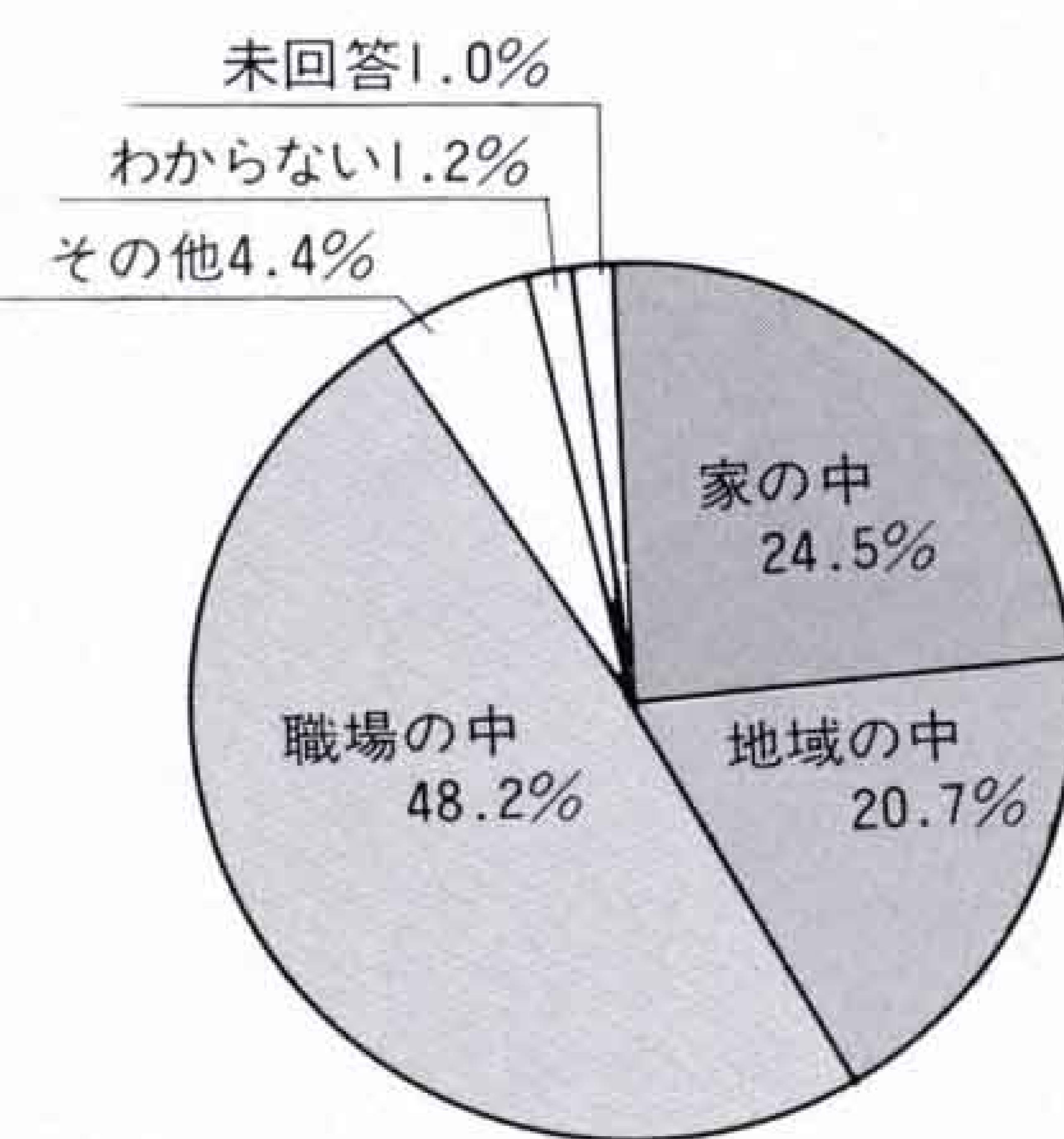
「目的や意義についても知っていた」が一七・五%、「あつたことは知っていた」が四七・六%で、何らかの形で知っていたと答えた人は全体で六五・一%でした。

男女別でみると、「目的や意義についても知っていた」と答えた割合は、男性の方が高い率を示しました。

がはつきり出ています。

職業別の中で、農林漁業者は「平等になつていてる」と答えた人が三二・六%あり、他の職業より高い率を示しました。

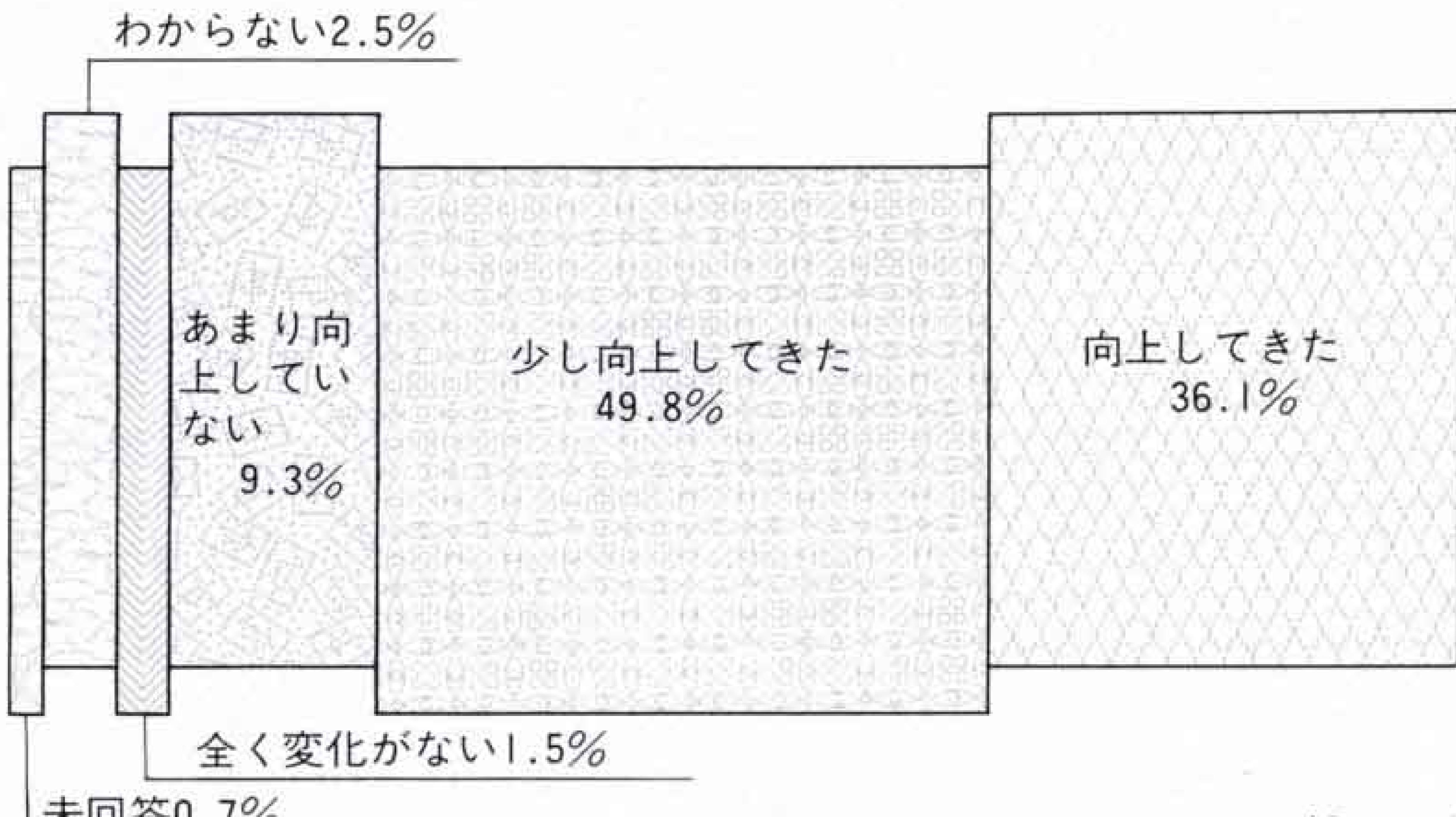
補助質問 平等になつていないと思われるのはどんなところですか。



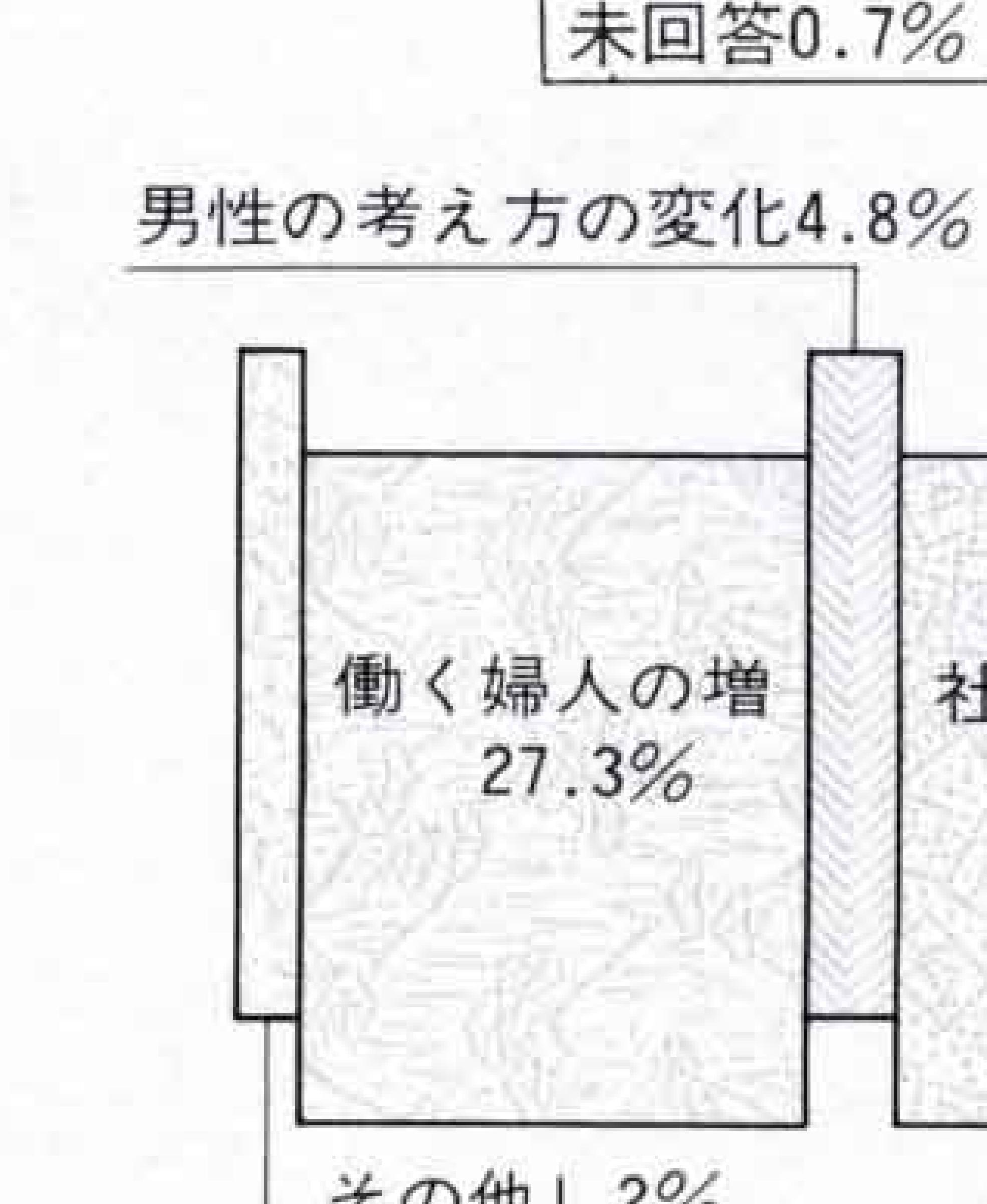
質問三 最近、婦人の社会的地位が向上してきたと思いますか。

が男性四五・五%、女性二八・二%と男性の方が婦人の地位向上を感じています。これに「少し向上してきた」を加えると男女の差はなくなっています。

補助質問 どのようなことに変化がみられると感じていますか。



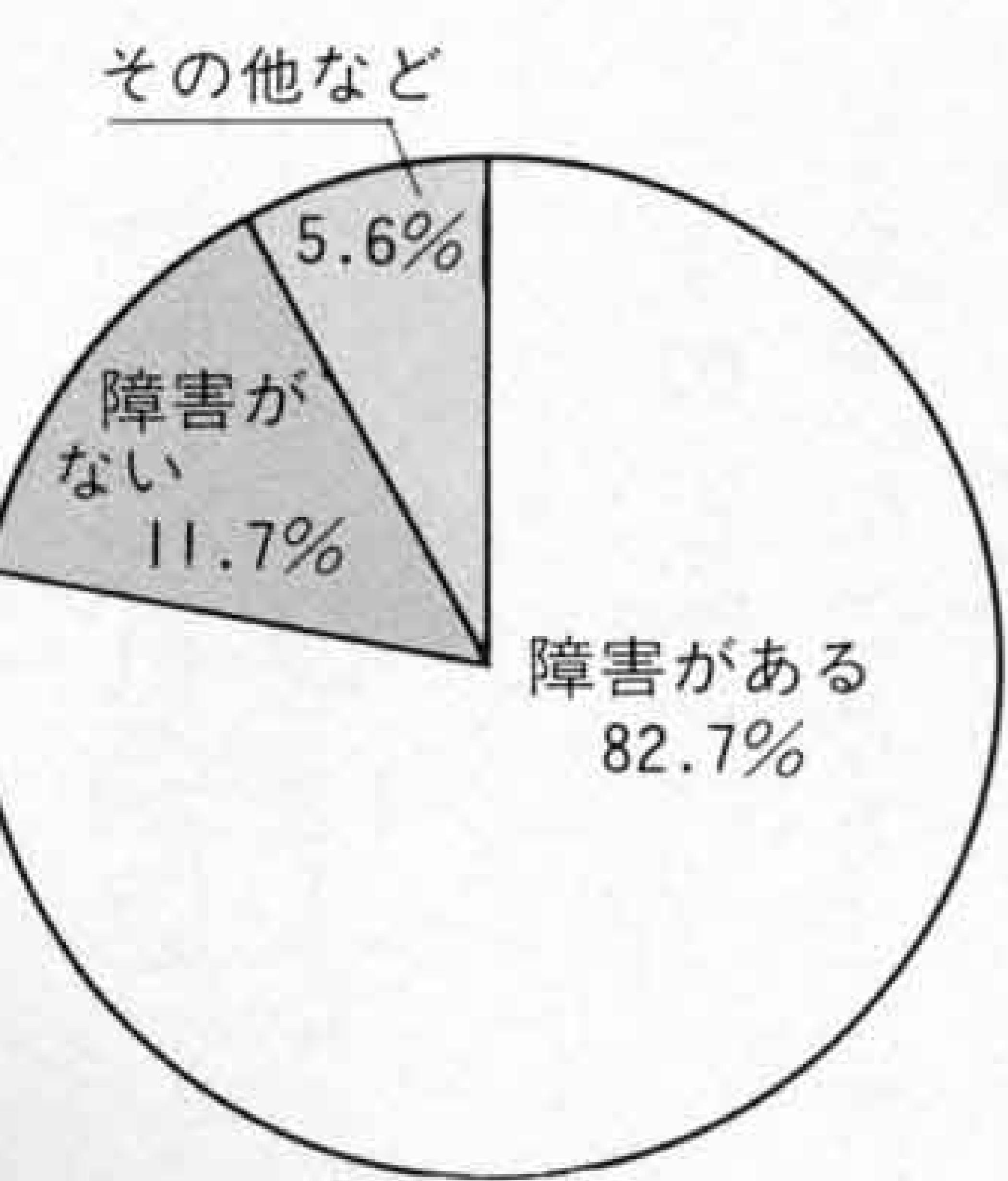
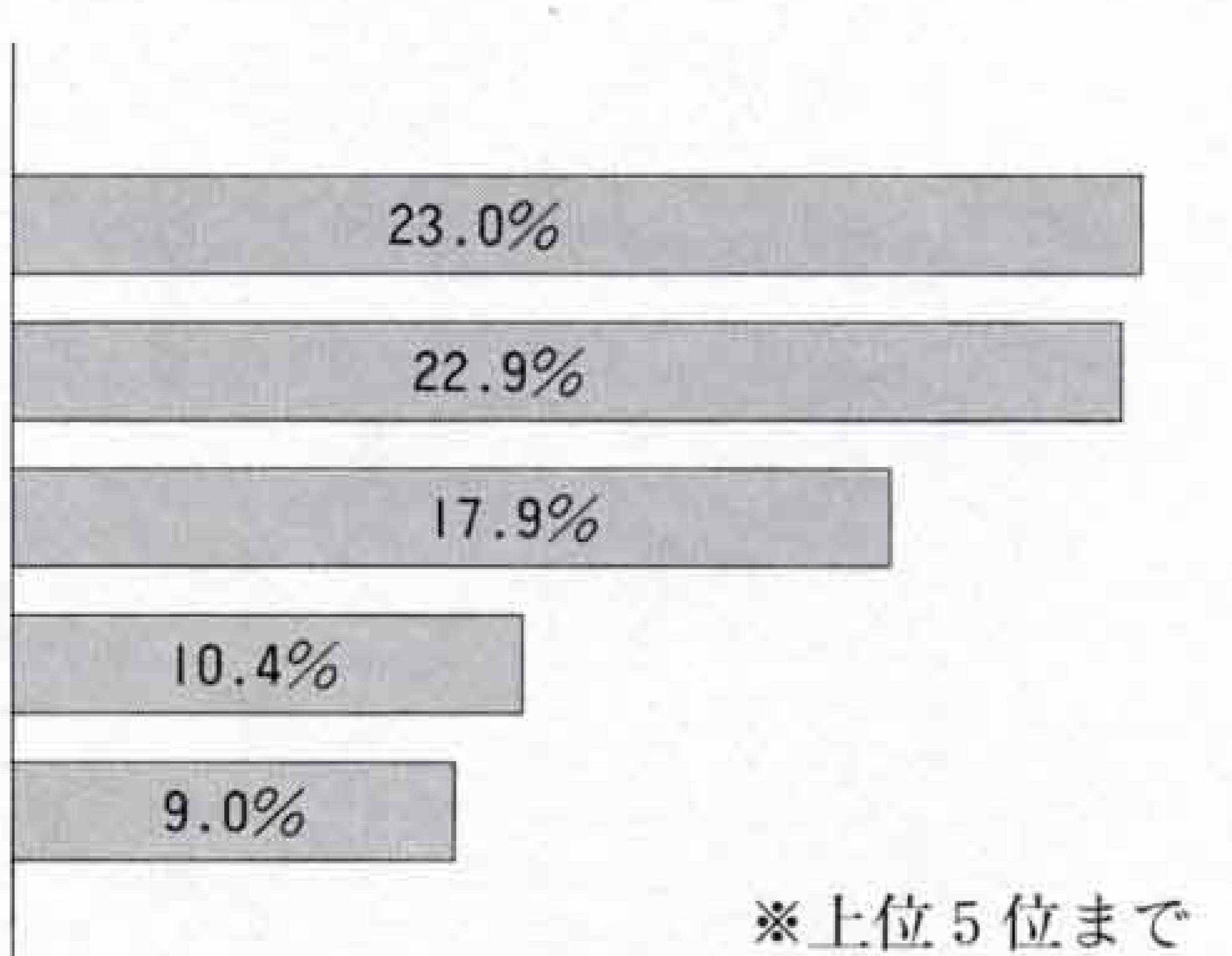
男女別にみると「向上してきた」で変わらないが「家庭」と答えた率は、男性一八・〇%、女性二九・一%と、ここでも男女の考え方には大きな差があらわれています。年代別については、割合の変化は多少ありましたが、全体の傾向としては「職場」「家庭」「地域」の順でした。



質問四 女性の地位向上をはかるのに、特にどのようなことが必要だと思いますか。

「女性の自覚」と「男性の理解」がほぼ同じ率でした。

男女別にみると、男性は「女性の自覚」二六・二%、「男性の理解」二〇・三%、女性は「男性の理解」二五・〇%、「女性の自覚」一〇・四%と逆の結果であり、お互いに相手に期待していることが推察できます。



質問五 婦人がずっと働き続けたいと思っても、働き続けられないと思つても、働き続けられない障害があると思いますか。



全体の八割以上の人人が婦人の就労については「障害がある」と答えていました。「障害がない」と答えている人は一一・七%にすぎませんでした。

男女別にみると「障害がない」と答えている男性が一六・二%に対し、女性はその半数の八・一%であり、ここでも男女間の考え方方に違いが出ています。

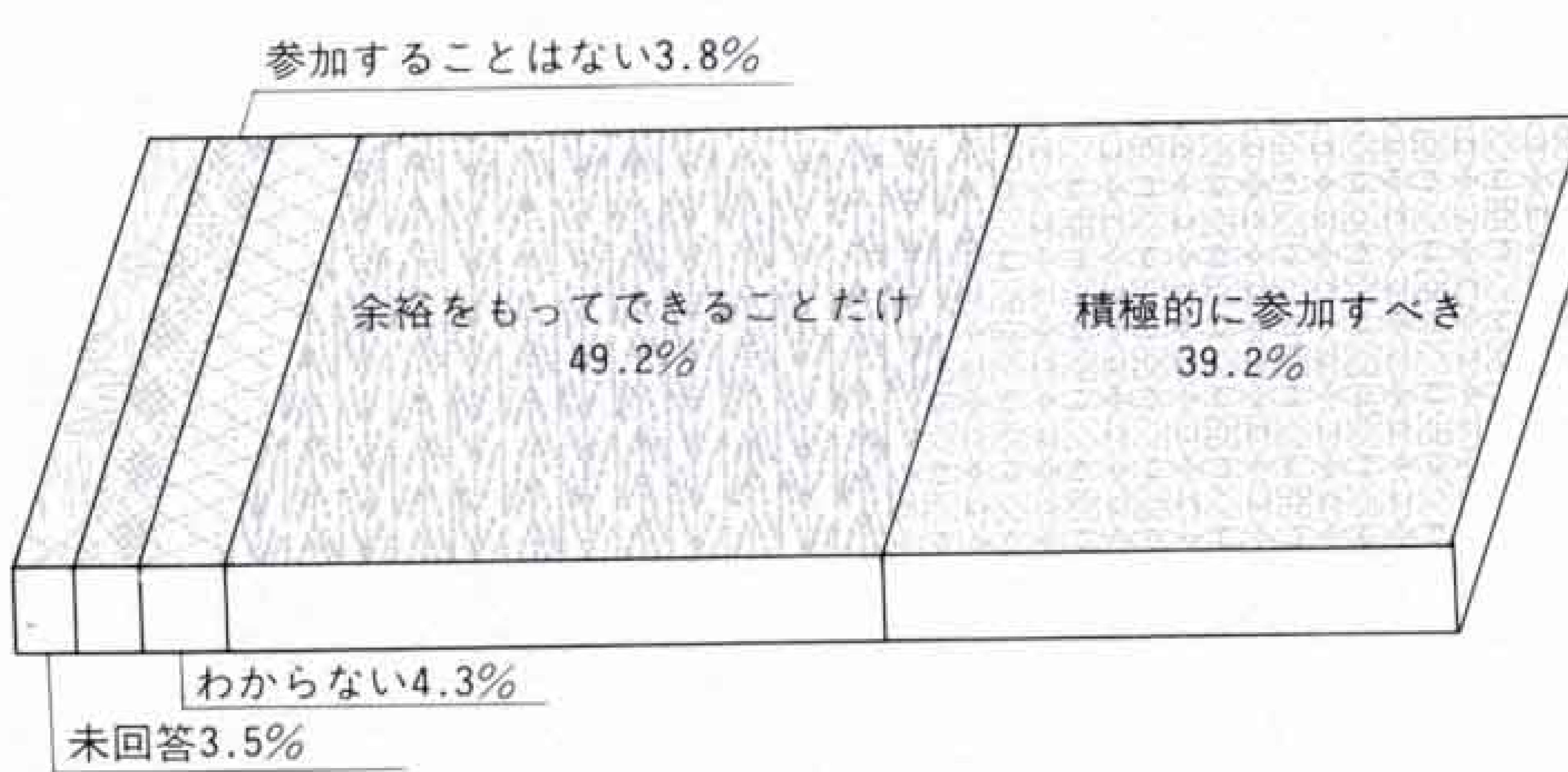
補助質問 その障害は何だと思ひますか。



約半数の人が「出産後の子育て」と答え、第一位でした。次いで「家族の病気や老人の世話」が三八%となっています。年代別みると年齢が高くなる

に従って「出産後の子育て」が低率になり、「家族の病気や老人の世話」が高率になってくる傾向が出ており、四十代からは「家族の病気や老人の世話」が第一位になっています。

質問六 婦人が自治会活動、ボランティア活動などへの積極的な参加についてあなたはどう思いますか。

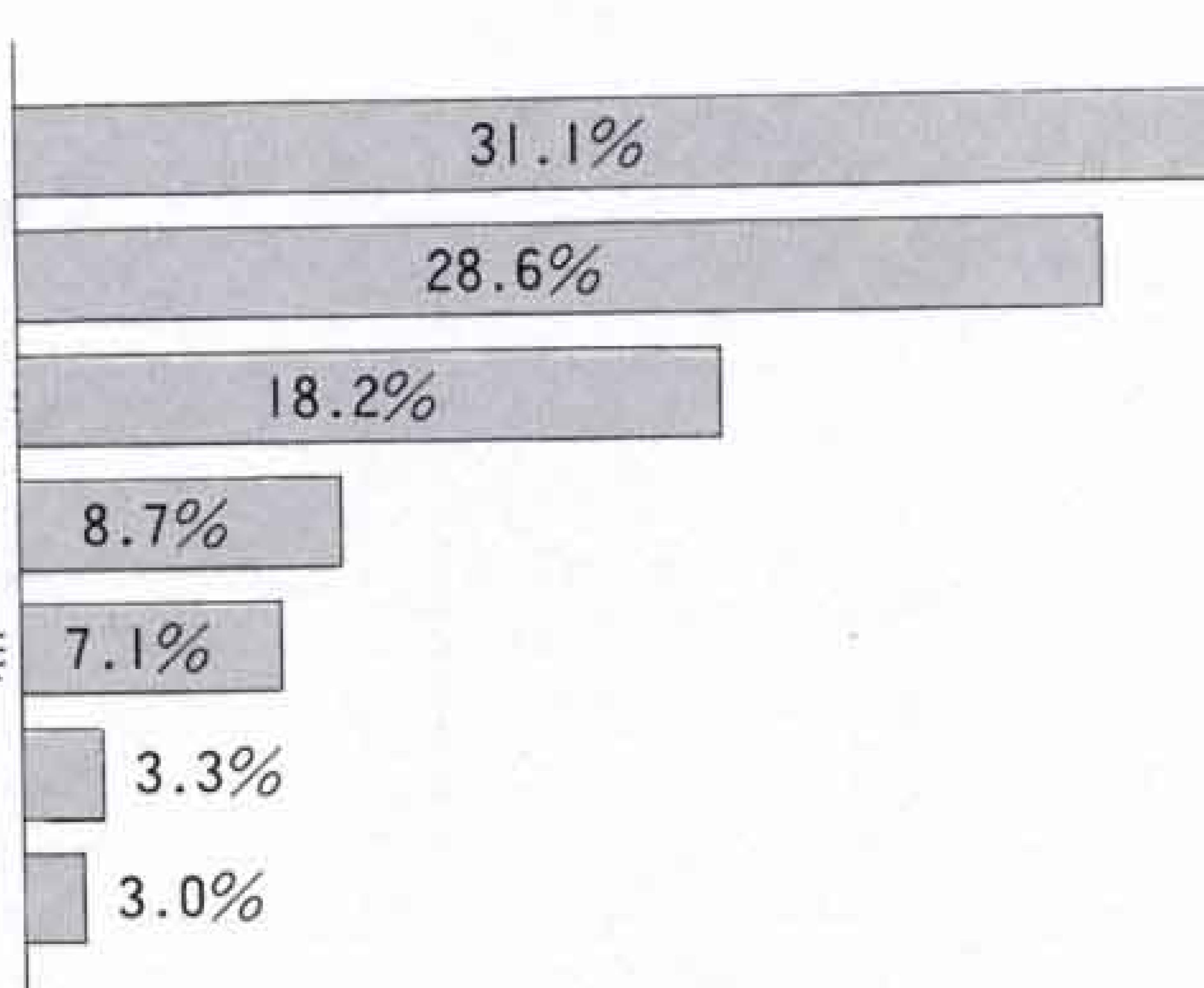


「積極的に参加」が三九・二%、「余裕をもつて」が四九・二%、合わせて八八・四%が参加すべきとの意見であり、男女別でもほとんど同じ考え方でした。

地区別みると「積極的に参加」の率が高かったのは、富士見台地区五二・一%、岩松地区五〇%、天

間地区四四・九%の順でした。逆に低かったのは、富士駅北地区二七%、吉永地区三一・八%、元吉原地区三二・九%の順でした。

質問七 夫婦の役割分担について、あなたはどうお考えですか。



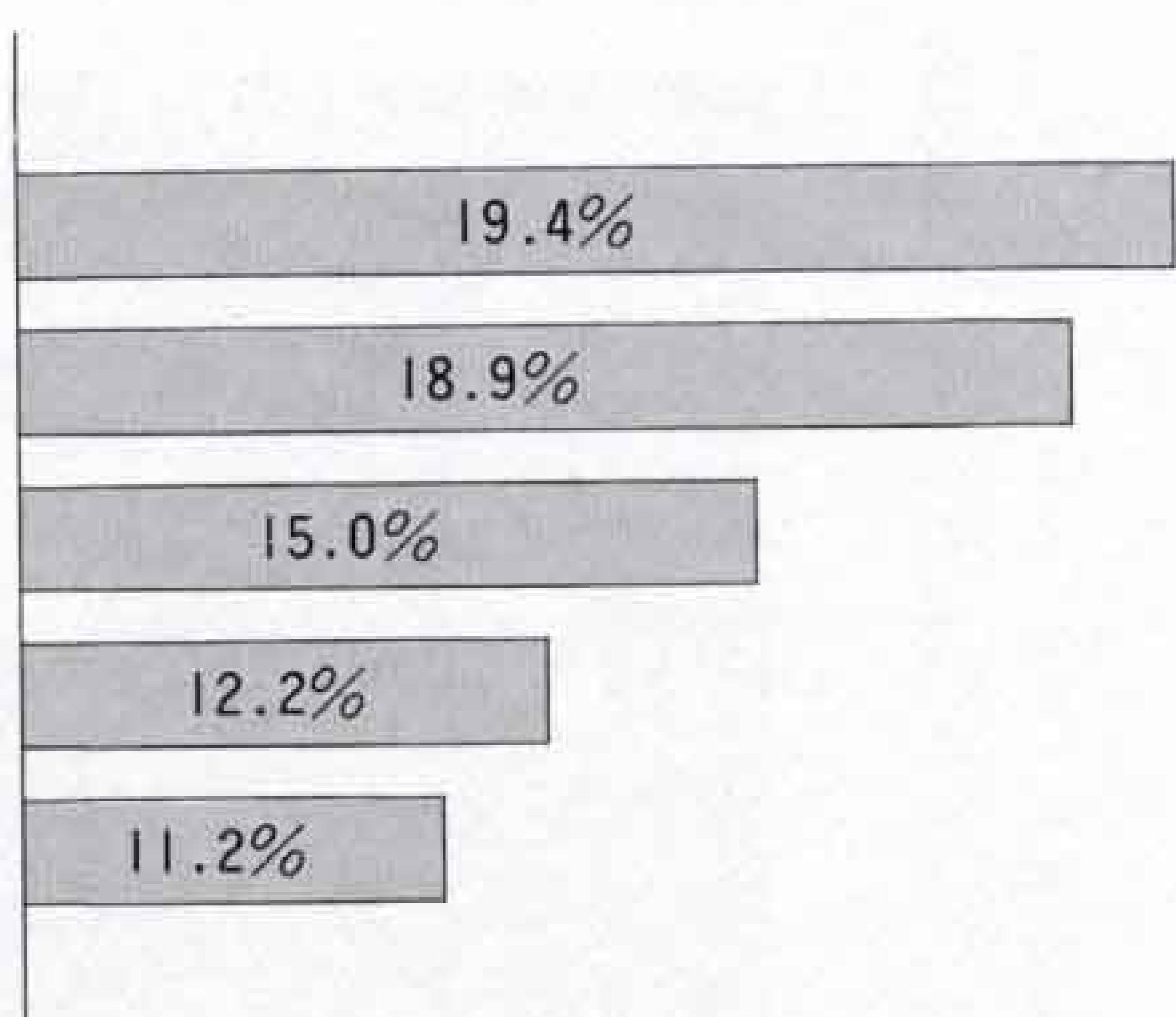
「夫は外、妻は家庭」が三一・一%。歴史的背景のもとでの役割分担である男は仕事、女は家庭と考えているのは約三人に一人の割合しかなく、夫婦の役割分担の変化として注目されます。

年齢別みると「夫は外、妻は家庭」と考えているのは二十代の二〇・九%から六十代の三八・八%まで、おおよそ年代ごとに高い率となっています。

職業別みると、会社員は「夫

婦とも外、家庭とともに」が第一位になつており、他の職業の人と第一位、二位が逆転しています。

質問八 女性の社会的地位向上をはかるため行政にどのようなことをしてほしいですか。

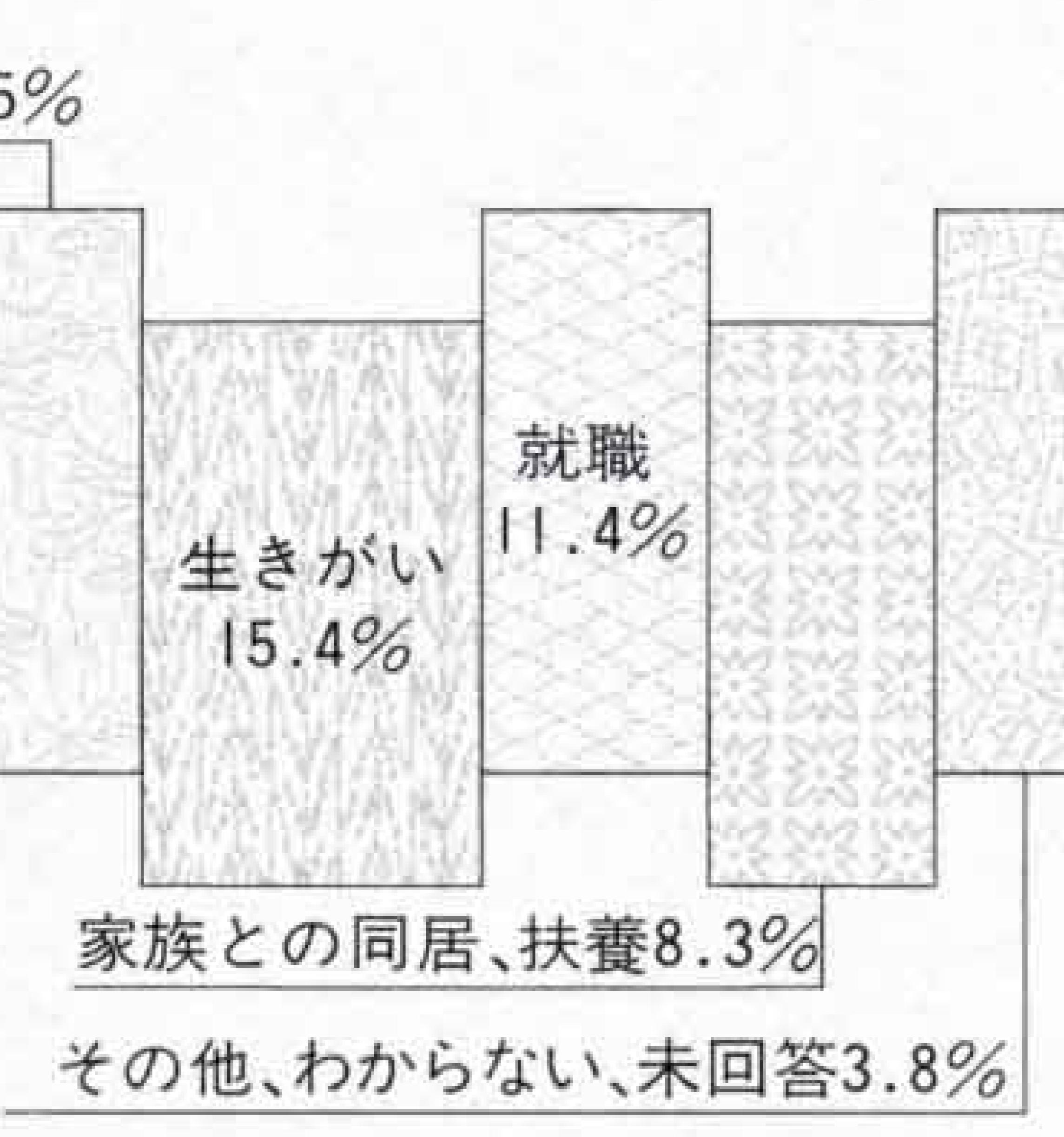


「学習機会の充実」が一九・四%で第一位、以下「地域活動の促進」一八・九%、「審議会などの参加」一二・二%の順でした。

上位の率が一〇%台で固まつてしまつていてることが考えられる一方、「わからない」が一五%あり、どう対応してほしいのかを決めかねていることも推察できます。

将来の心配は「病気のことと「年金」

質問九 高齢化社会になつたとき、問題になるとしたらどのようなことだと思いますか。



高齢化社会になつたときの問題点は「病気」が二七・七%で第二位、次いで「公的年金」の二七%が第二位で、第一位との差はほとんどありませんでした。



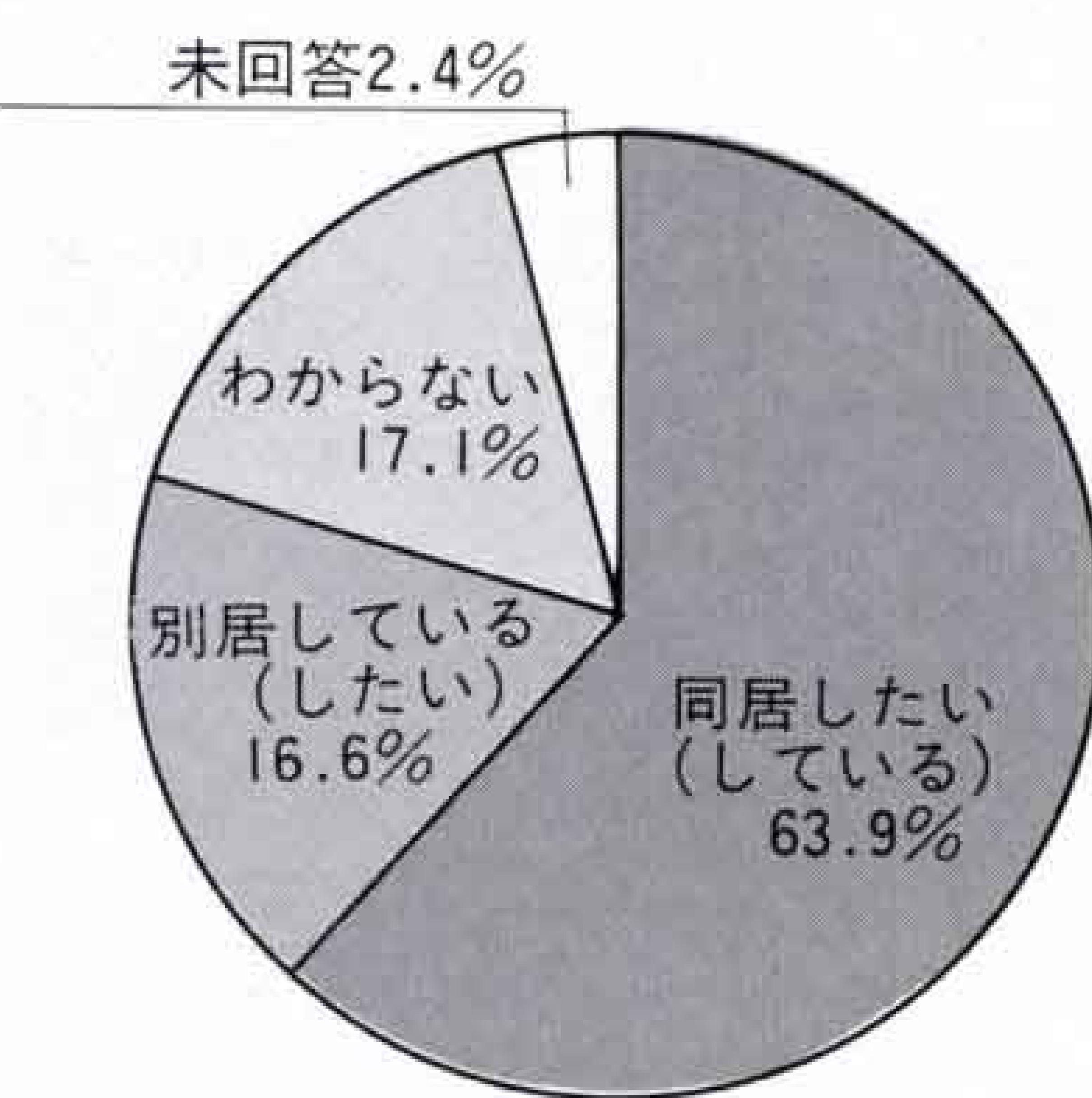
昭和59年調査 %	
同居するのが望ましい	65.4
別居するのが望ましい	12.4
わからない	22.2

年代別にみると、若い人は「公的年金」に高い率を示し、高齢者は「病気」のことに高い率を示しています。四十代までは「公的年金」が第一位であり、五十代から「病気」が第一位になります。特に、三十代では「生きがい」が一九・八%で第二位を占め、「病気」は一八・三%で第三位になりました。

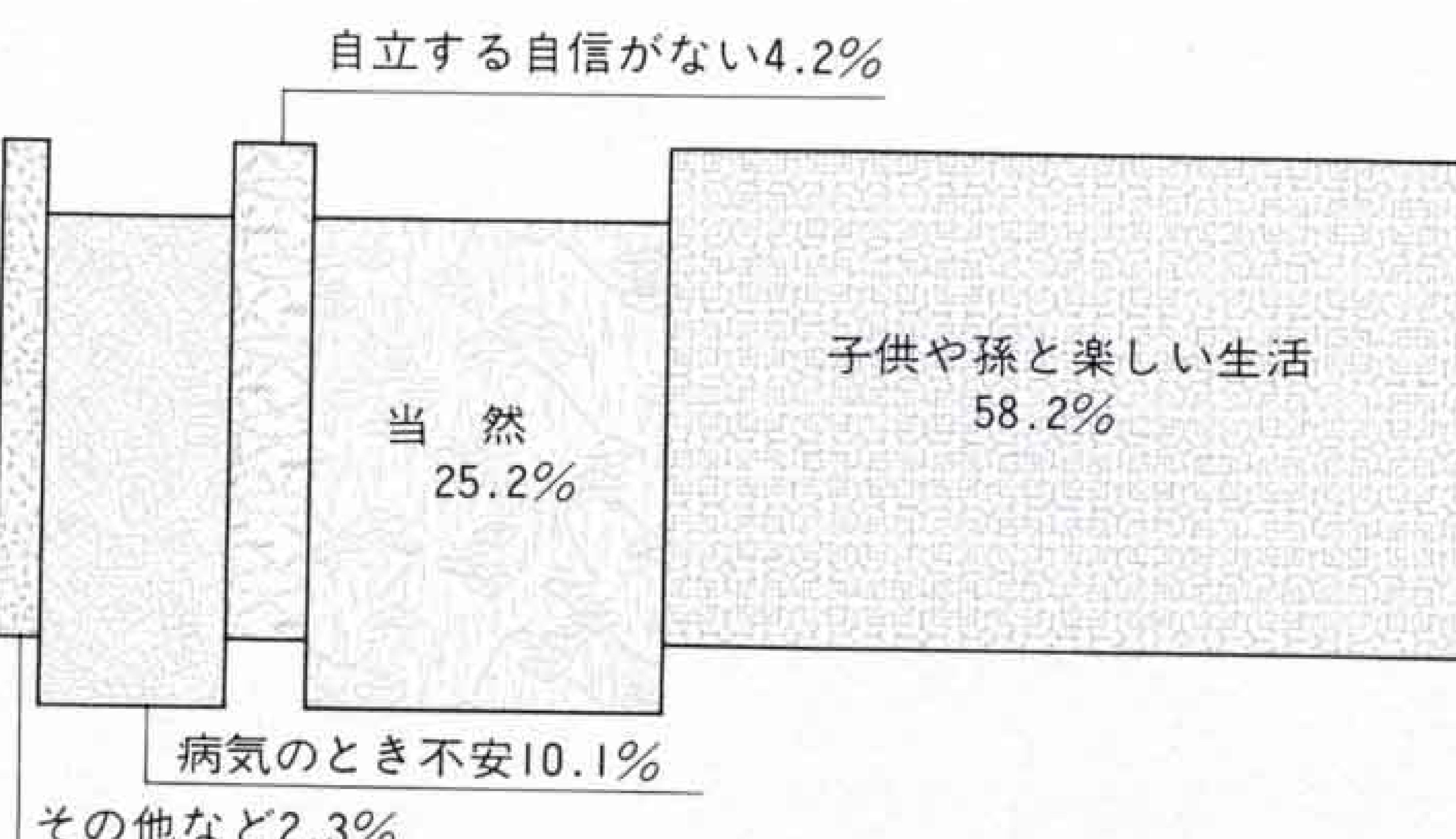
質問十 老後になつて子供と同居したいですか、それとも別居したいですか。

昭和五十九年の高齢化社会に関するアンケートと比較しても「別居したい」と答えた人の割合はほとんど変わりませんでした。

「同居したい」が六三・九%、「別居したい」が一六・六%で、市民の三人に一人が同居したいと答えていました。



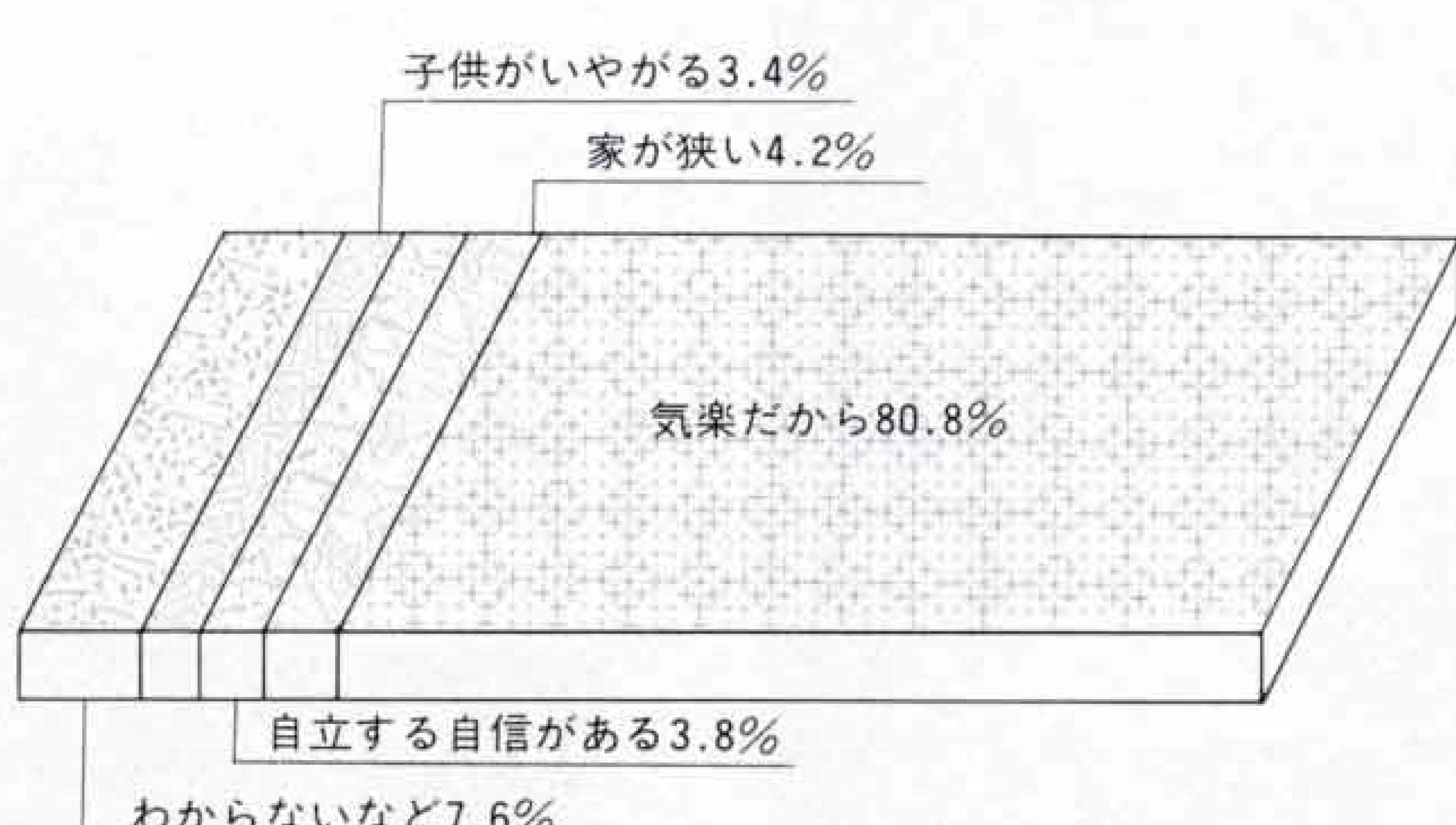
昭和五十九年の調査と比較する
「子供や孫と一緒に住むのは当然」が多いと答えた人が五八・二%と最も多く、「一緒に住むのは当然」が二五・二%、「病気のとき不安」一〇・一%と続き、この三つで九三・五%を占め、精神的安定を求めている人が多いことがうかがえます。



補助質問 同居したい理由は何ですか。

地区別にみると「同居したい」の第一位は神戸地区の九〇%で、一番低かったのは富士見台地区の三七・五%と大きな差が出ました。男女別にみると男性（六七%）の方が女性（六一・三%）より「同居したい」と思っている人が多くいました。

と、義務的な「一緒に住むのは当然」が減少し、「楽しい生活がしたい」が増加しています。

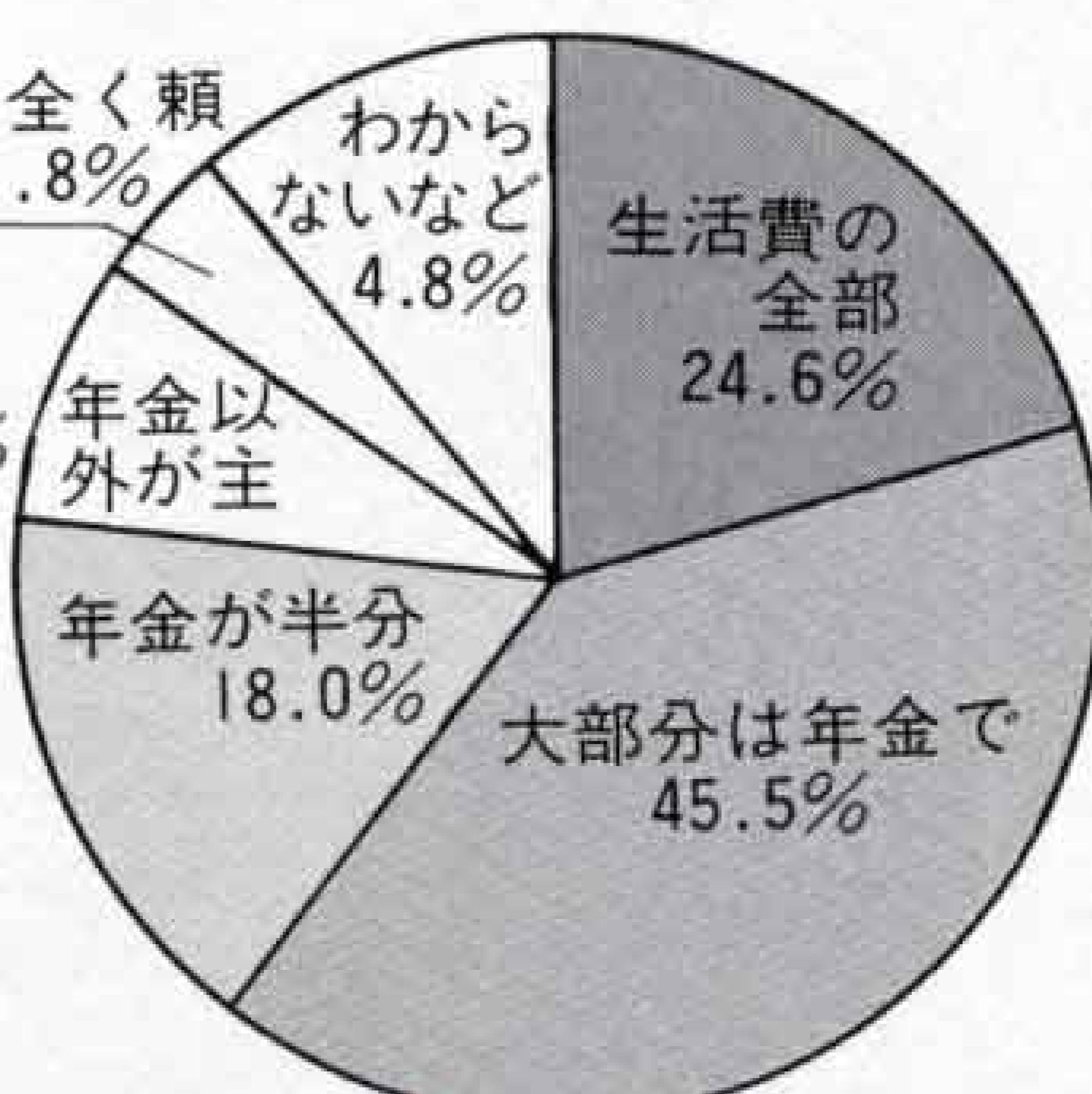


補助質問 別居したい理由は何ですか。

昭和59年調査 %	
当然のつとめ	39.5
自然の愛情	38.4
何かと好都合	16.7
経済的に	3.4
その他	1.6

質問十一 老後の生活資金として、国民年金、厚生年金などの公的年金にどのくらい頼りたいですか。

この傾向は男女別でも年代別でもあまり変化がないが、二十代の答えの中で「子供がいやがると思う」が一一・一%を示し、他の年代と異なった割合を示しました。



別居したい理由の第一位、「お互いに気楽だから」が八〇・八%を

職業別でみると「年金以外の収入が主」「年金には全く頼らない」の合計が、自営業、農林漁業では約二〇%であるのに対して、会社員は四・三%で四分の一にとどまつていました。